

NEWSLETTER No. 35

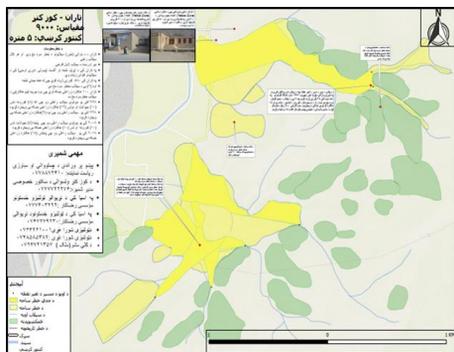


Church World Service

アフガニスタン防災力向上事業本邦研修開催

CWS Japanでは、2017年から外務省NGO連携無償資金協力事業として、アフガニスタン東部における防災力向上を目指した事業を行っています。約3年間の事業によって、現在アフガニスタン政府・NGO・コミュニティ代表などが、自分達自身で洪水や土砂災害などの災害リスクを特定し、ハザードマップを作成し、そこに避難所情報や避難経路を書き込んだ防災マップを作り、コミュニティ防災計画を策定できるまでになりました。国土防災技術株式会社の方々のサポートもあり、地形判読からGISマップ作成、災害リスク分析など、防災のサイエンスを現地に伝えてきました。

2019年6月10日～15日まで、アフガンの防災関係者11名を日本に招へいし、本邦技術移転研修を行いました。リスク評価分析手法の更なるレベルアップを行ったり、静岡県由比地すべり地を視察し、静岡県危機管理課の災害対応体制についても学びました。また、本事業で取り組んできた防災サイエンスをかけ合わせたコミュニティ防災活動を他地域でも展開できるようにガイドラインの骨子を作成しました。



本事業対象地区のTaran村における防災マップ

現在アフガニスタンは、残念ながら世界でとても危険な国の一つとされていて、9月に予定されている大統領選挙に向けて更なる治安悪化が懸念されています。そんな中、洪水・土砂災害・地震・干ばつなどの自然災害にも見舞われる国でもあります。アフガニスタン

人自身が自分達の命や暮らしを守っていけるよう、日本の教訓から伝えられる防災サイエンスは多いと感じています。（文：事務局長 小美野 剛）



静岡県由比地すべり対策地への訪問

ミャンマー住民参加型生活道路改善プロジェクトモニタリング

前号で予告しましたとおり、今年4月からエーヤワディーデルタ地域で実施している生活道路改善プロジェクトに、6-7月にかけて、モニタリングに入りました。雨期が始まったという連絡を受け、その後の工事の進捗が大変気になっていましたが、工事は順調に進められており、その作業スピードに驚かされました。

このプロジェクトでは重機を使わず、労働に対する賃金も支払っていません。裨益者である地域住民自らが労働力を提供し、資機材と作業員の管理も行っています。地域住民がこのようなボランティアワーク（共同作業）に積極的な理由として、彼らの仏教徒としての生活習慣にあることが、住民への聞き取りから分かりました。村の中には僧院があり、信仰心篤い彼らは仏教行事や冠婚葬祭がある度に地域内で献金を集め資機材調達から帳簿管理、食材調達、調理の全てを仕切りますし、僧院の引っ越し作業には何日間も労働を提供し、共同作業を行った話を聞きました。地域の後継者不足に悩む今日の日本では存続が危ぶまれる自治会活動もミャンマーでは若年層の活躍が見られます。

各世帯月平均収入が日本円に換算して5,000円以下という経済状況の中、自分達が提供できるものは提供しようという姿勢に頭が下がりました。今回、これらの村を束ねる村区長に面会した折、支援者側の私達に決して媚びることなく、更なる支援を求めない毅然とした態度にプライドを感じました。

またさらに、本事業対象村以外でも異なる工法で住民による生活道路改善事業がCWSミャンマーによる資金提供の下で始まりました。これらは、CWS側が提供するの建設資材のみです。このプロジェクトを機に、周辺の村々でも次々とこの活動が波及していくことが期待でき、それぞれ異なる立地で用いる工法・資材によってどのような効果の違いが出てくるのかを見るのも楽しみなところです。

そんな中、最大の懸念事項である河岸侵食は止まるところを知らず、「前回来た時は確かここに木が生えてたよね？」という所がもうそこは崩落していたという風に毎回訪れる度に浸食が進んでいるのが分かります。ミャンマー政府は、河岸侵食の問題を認識しており、他地域で公的資金を投入し、対策工事を行っています。今回、それらの対策工現場も訪問しましたが、それらは人口が密集する市街地であったり、経済的重要拠点の周辺だったりするなど政府にとって優先度の高い所であることが分かりました。そういったことから、私達の対象地は政府にとって優先順位の低い地域であることを感じました。現在、次の段階に向け、本事業で自信をつけた地域住民の皆さんに何が提案できるかを調査中です。今後も私達の災害対応への試行錯誤が続きます。

(文：プログラム・マネージャー 牧 由希子)



改善工事が終了した道を住民と共に歩く



はじめまして。8月からプロジェクト・オフィサーとしてCWS Japanの一員となりました、西澤紫乃です。わたしはこれまで、学生団体によるカンボジアでの教育ボランティア活動に参加し、大学院ではミャンマーにおけるコミュニティを基盤とした水資源管理について研究しました。また、国連機関でのインターンを通して、自然災害に対する緊急支援及び各パートナー間の協力が、被災地の少しでも早い復興と、一人一人の人間らしい生活を取り戻すために、大きな役割を果たすことを学びました。これらの経験を通して、わたしが一貫して持っていた問題意識は、いかに公平に、女性や子ども、少数民族など最も支援を必要としている人たちに支援を届けるかということでした。それを模索するにあたって、現地への理解は不可欠です。そのような支援は与えるだけの一方的な方法ではなく、多様なパートナーとの連携が求められるとも思います。また、現地に根付いた文化や慣習などに、色々な知恵や問題解決の糸口が存在してる場合も多くあります。災害からの復興という観点からいうと、日本は東日本大地震など大きな地震・津波や、西日本豪雨と言った記録的な異常気象を経験してきており、その復興に向けた各地域の取組と課題は、世界のほか地域においても、コミュニティレベルで共有されるべきものだと思います。今後、CWS Japanの活動を通して、現地の人々への理解や寄り添う気持ちを忘れず、CWS Japanの経験の豊富なメンバーから学びを得ながら、様々な支援のあり方を模索したいと思います。

(文：プロジェクト・オフィサー 西澤 紫乃)